

野外調査報告

盛岡市を結節点とする広域観光ルートと 「材木町よ市」に関する地理学的考察

松 村 公 明*・秋田大学地理学研究室学生**

キーワード：盛岡 観光ルート 定期市 東北地方 観光地理学

I はじめに

本稿は、2005年度「地理学実験Ⅲ」（秋田大学教育文化学部・文化環境選修専門科目）の調査に基づく短報である。紙幅に限りがあるため、調査の方法と結果を簡略に記述することとする。

調査の課題は、①盛岡市を訪問・経由する観光客を対象に、その広域観光ルートについて調査すること、②盛岡市の「材木町よ市」を観光資源として捉え、出店者の構成について調査すること、以上の2つである。調査者は、秋田大学地理学研究室所属2・3年次学生13名を主体とし、これを補助するために、大学院生と4年次学生が任意で加わっている。調査にともなう現地滞在期間は、2005年9月24日（土）～28日（水）の5日間である¹⁾。

II 観光ルート調査

1. 調査の方法と概要

調査日時は、2005年9月24日（土）9時～14時と9月25日（日）9時～16時である。両日は、3連休の中日と最終日に当たる。

調査者全体を7班（1班当たり2～3名）に分け、盛岡駅前に重点を置きながら、市内観光スポットの各調査地点に配置した。調査地点は第1図にも示すように、つぎの7地点である²⁾。

①盛岡駅東口「バス乗り場1～3番」

②盛岡駅東口「バス乗り場7～10番」

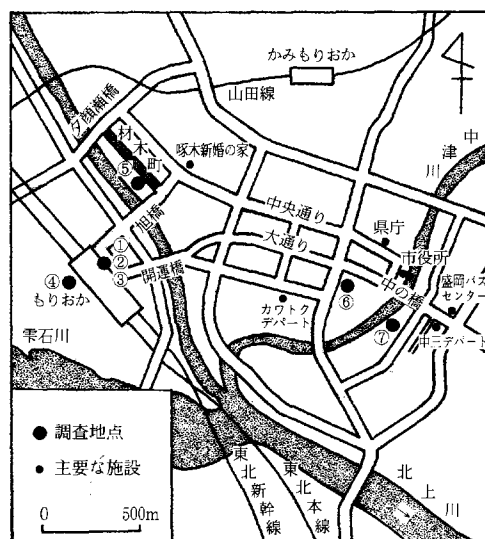
③盛岡駅東口「滝の広場」

④盛岡駅西口「バス乗り場」

⑤材木町「光原社」前

⑥内丸「岩手公園」前

⑦中ノ橋通1丁目「もりおか啄木・賢治青春館」前
バス乗り場別に主要路線をあげると、①には、八幡平方面行きをはじめ、岩泉・龍泉洞行き、久慈行き「白樺」、浄法寺・二戸行き「スーパー湯～遊」が発着する。②には、宮古行き「106急行」、鹿角・大館行き高速バス「みちのく」をはじめ、繋温泉行き、網張温泉行き、市内定期観光バス、花巻空港連絡バスが発着する。④に発着するのはすべて高速バスであり、弘前行き「ヨーデル」、仙台行き「アー



第1図 盛岡市中心部と調査地点（2005年）

注) 図中の○数字は本文中の調査地点番号に対応する。
(1万分の1地形図「盛岡」(2003年修正)をもとに作成)

* 秋田大学教育文化学部

** 利部 慎（秋田大学・院）、鎌田大作、小林友美、高橋香織、幕沢美穂、湊 聖佳、若狭真紀（秋田大学教育文化学部4年次）、木村文美、工藤慶太、佐々木力、佐藤香奈子、志村一樹、仁井田龍太（同3年次）赤石卓也、石井絵里、櫻 淳美、佐藤信彌、清水 志、高嶋めぐみ、内藤 淳（同2年次）

バン」、十和田湖行き「高速とわだこ」をはじめ、青森行き「あすなる」、八戸行き「八盛」、軽米行き「ウィンディ」、久慈行き「久慈はく」である。

聞き取り調査は、バス乗り場(①②④)では、上述の中長距離・高速バスに乗車するため整列している個人・グループに対して³⁾、それ以外(③⑤⑥⑦)では、外見から判断して旅行者と推測される個人・グループに対して⁴⁾それぞれ行なった。調査項目の主体は、旅行の目的、旅行の発地、交通手段、前泊地と後泊地である。

その結果、聞き取りの総数は224組であり、そのうち、観光目的の旅行者(観光客)は111組であった。その他は冠婚葬祭、帰省・帰宅、業務目的の旅行者であったため、本稿では考察の対象から除いている。

2. 観光ルートの事例

観光客111組のうち、4組の周遊ルートを事例として第2図に示した。4組の事例は、少なくとも「前泊地→盛岡を訪問・経由→後泊地」の行程を含む。

事例1は、岡山を発地とする母娘(推定40代と10代)2人連れのルートである。彼女らは、十和田湖を前々泊とし、前日に盛岡経由で繋温泉に移動して前泊した。当日は、もりおか啄木・賢治青春館など盛岡市内を観光した後、花巻温泉へ移動して後泊、翌日には花巻空港から帰途につく。

事例2は、陸前高田を発地とする60代女性単独のルートである。彼女は、前日に弘前の知人宅を訪問、前泊した。当日は盛岡でバスを乗り継ぎ、繋温泉へ移動して後泊、翌日には再び盛岡を経由して帰途につく。

事例3は、東京を発地とする30代男性単独のルートである。彼は、前日に仙台と多賀城に用務を兼ねて立ち寄った後、安比高原まで移動して前泊した。当日は盛岡でバスを乗り継いで、岩泉・龍泉洞周辺で後泊、翌日には再び盛岡を経由して帰途につく予定である。

事例4は、首都圏を発地とする20代女性2人連れのルートである。彼女らは大宮で合流の後、東北新幹線を利用して仙台で前泊した。当日、盛岡を経由して小岩井農場を訪れた後、盛岡から秋田新幹線を利用して秋田で後泊する。函館への往路に秋田で後泊する理由は、翌日、JR五能線の手窓を楽しみた

いためという。五能線には、秋田-弘前・青森を結ぶ快速列車「リゾートしらかみ」が1日に2往復運転されている。

以上の4つの事例にも表れるように、観光客は、前泊地-後泊地間の移動に際して、盛岡を唯一の乗り継ぎ地点として利用している。言い換えれば、盛岡を訪問・経由する観光客は、盛岡との直行ルート(1次アクセス)の及ぶ宿泊地を選択する傾向にあることがわかった。

3. 前泊地・後泊地の分布圏域

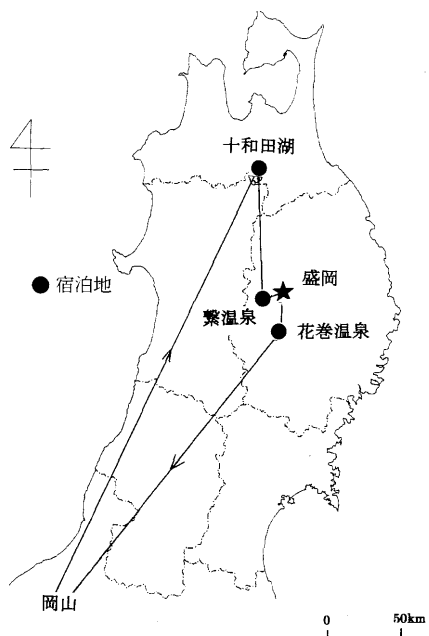
それでは、盛岡を訪問・経由する観光客に選択される宿泊地は、どのように分布しているのか。そこで本節では、前述の111組の観光ルートにおける、前泊地と後泊地(以降、前後泊地とする)に着目し、その分布圏域について検討する。

たとえば、第2図に示した4組の観光ルートを例にとり、以下にその前後泊地をあげてみる。事例1では、繋温泉と花巻温泉、事例2では弘前と繋温泉、事例3では安比高原と岩泉、事例4では仙台と秋田があげられ、前後泊地の総件数は8となる。同様の手続きにより、111組すべての前後泊地を抽出すると、総件数は129となった。そのうち、前後泊地が盛岡市街地であるものを除いた結果⁵⁾、本節で対象とする前後泊地の総件数は84件となった。

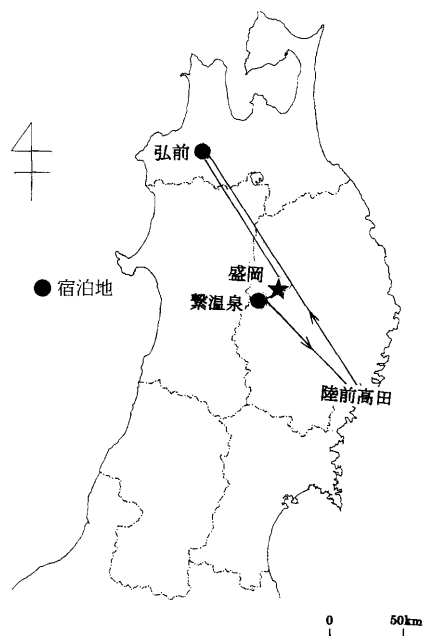
これら84件を100%として、圏域別に件数比を表したものが第3図である。圏域の区分は、盛岡を中心とする40km圏、40-80km圏、80-120km圏、120km圏からなる4つの距離帯と、東西南北の4つの方向帯セクターを重ね合わせることによって設定した。各圏域内の前後泊地はすべて付表に記載してある。

第3図によれば、件数比が高い順に、W1圏域(26%)、N2圏域(16%)、N3圏域(14%)となり、これら3つの圏域だけで、全体の56%を占めることがわかった。W1圏域には、繋、鶯宿、網張の各温泉をはじめ、岩手山南麓・雫石盆地周縁部の温泉地群が位置する。N2圏域には八幡平周辺の温泉地群が、同様に、N3圏域には十和田湖周辺の温泉地群がそれぞれ位置する。

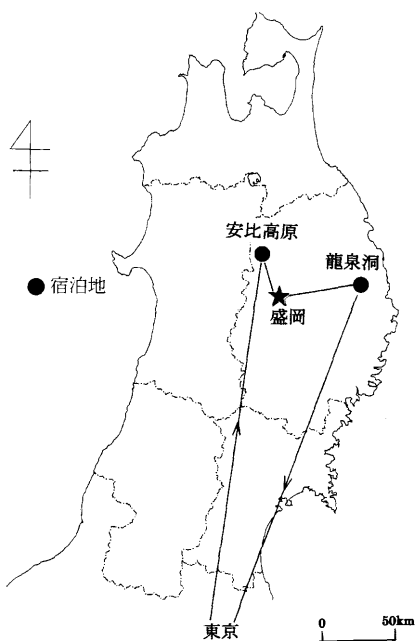
すなわち、盛岡を経由する観光ルートには、東北自動車道を軸に広がる十和田八幡平地域との密接な交流が認められる。この理由として、盛岡の交通位置が、首都圏・仙台都市圏-十和田八幡平地域間の



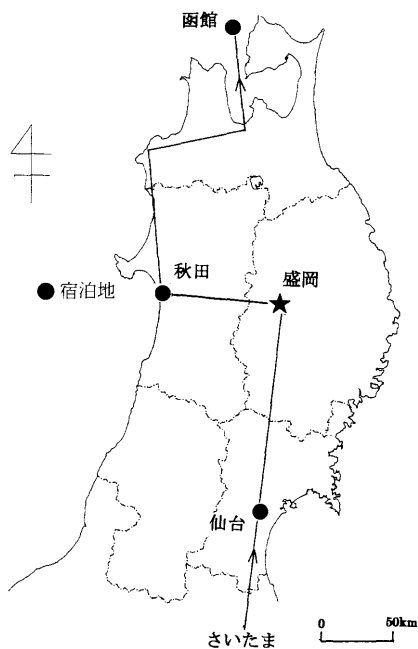
a) 事例1



b) 事例2



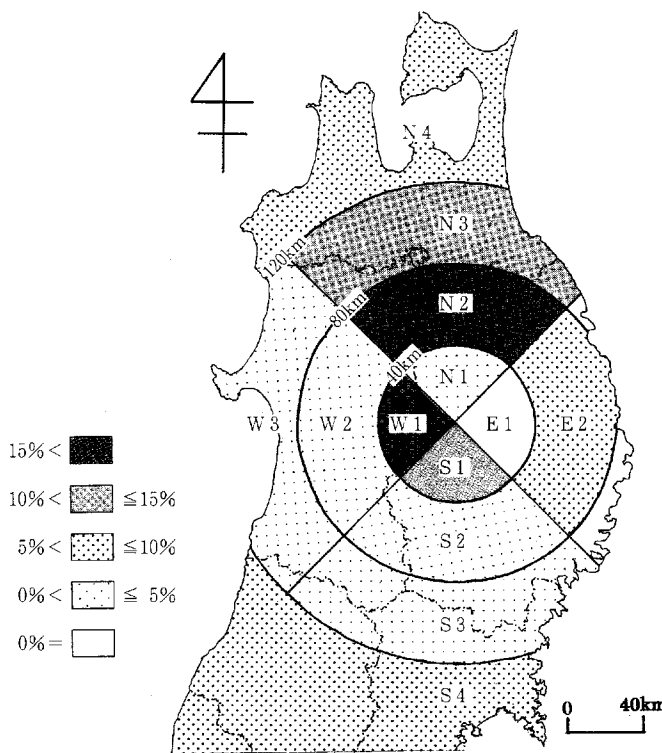
c) 事例3



d) 事例4

第2図 盛岡を訪問・経由する観光客の観光ルートの事例 (2005年)

(2005年9月24日・25日の聞き取り調査により作成)



付 表

圏域	前後泊地
E 1	(なし)
E 2	宮古 浄土ヶ浜 岩泉(龍泉洞)
W 1	繋温泉 雫石(鶯宿 網張 小岩井)
W 2	横手
W 3	秋田
N 1	岩手山
N 2	八幡平(玉川 蒸ノ湯 松川 藤七) 鹿角 安比高原 葛巻
N 3	十和田湖 奥入瀬 弘前 碓ヶ関
N 4	青森 函館
S 1	花巻温泉
S 2	夏油温泉 水沢 平泉
S 3	一関 鳴子温泉
S 4	仙台 東京 宇都宮

第 3 図 盛岡を訪問・經由する観光客の前泊地と後泊地の分布圏域 (2005年)

(2005年9月24日・25日の聞き取り調査により作成)

最短ルート上にあること、さらには、東北新幹線と東北自動車道経由の高速バス路線との結節点に当たることがあげられる。

これに対して、W1圏内に位置しながらも、田沢湖高原や乳頭温泉郷など、秋田県側の宿泊地は前後泊地に選択されていない。同様にW2圏域、W3圏域の件数比もきわめて低いことがわかった。この理由として、これらの圏域を横断するJR田沢湖線には、首都圏・仙台都市圏から、秋田新幹線「こまち」が直通で乗り入れていること、そのため、盛岡とこれらの圏域間を直結するバス路線が開設されていないことがあげられる。

Ⅲ 「材木町よ市」の出店者構成調査

1. 調査の方法と概要

盛岡市材木町商店街は、盛岡駅から旭橋経由で徒歩10分圏内に位置する(第1図)。コミュニティ道

路整備事業等による街路拡幅を経て、1993年に現在の商店街景観が形成された。同時に、愛称を「いーはとーぶアベニュー-材木町」とし、宮沢賢治とその作品をモチーフにした6つのモニュメントが、街路歩道上に配置された。光原社は「注文の多い料理店」の発行所として知られるが、現在では民芸品・工芸品店として観光案内書には必ず掲載される。この他にも、商店街には県内各地の民芸品・工芸品店が立地し、とくに週末には街路を散策する観光客の姿が目立つ。

「材木町よ市」(以降、よ市とする)は、材木町商店街を会場に、定期的開催される路上買物市(青空市)である。市日は4月～11月の毎週土曜日であり、15時～18時の間、商店街の街路約430mの全区間が歩行者天国となる。1974年9月の開始以来、2005年で32年目を迎える。

調査日時は2005年9月24日(土)15時～17時である。当日の出店は60店であった。聞き取り調査の項

目は、出店年、本拠地、出店組織、出店の動機、出店継続の理由などである。聞き取り調査は、来客応対の合間を見計らうかたちで行ない、1店当たり10分から15分程度の時間を割いていただいた。

2. 出店年代による出店者の特徴

調査当日の出店年構成は、1970年代が17店、1980年代が10店、1990年代8店、2000年代25店であった(第4図)。そこで、出店年代別に出店者の特徴を記すことにする。

1) 1970年代出店者の特徴

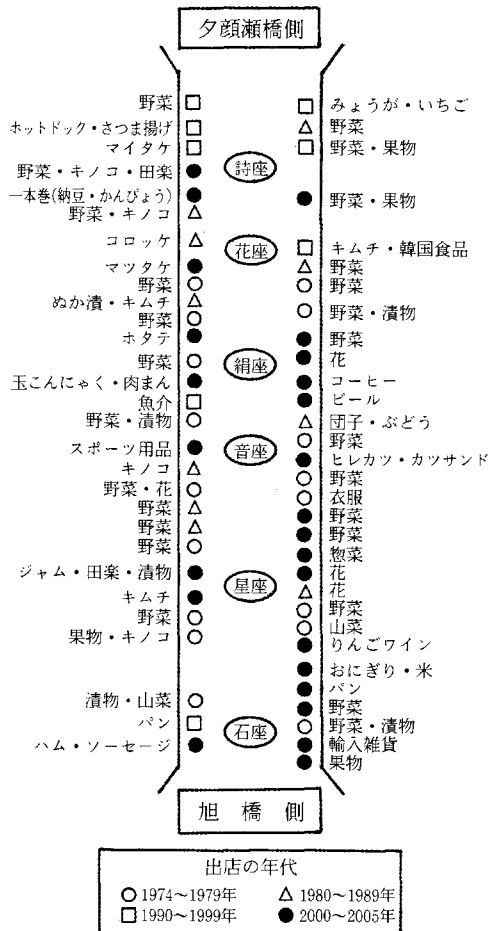
これは、よ市開始から旭橋開通までの期間に出店した伝統的な世代に当たる。出店者の主体は、盛岡市内・近郊に居住する農家世帯であり、主力商品は青果物、山菜・キノコ、漬け物である。出店の動機は「材木町より依頼された」、「行商からの出店機会として」「農協の規格外でも新鮮な野菜を販売できる」の回答が目立つ。出店を継続する理由としては、「生きがいや趣味として」、「長年の信用・信頼」、「顔なじみの顧客とのコミュニケーション」などがあげられている。日常的には農協への出荷を基本としているが、直売の方法として、道の駅直売みこだ所における販売や、「神子田朝市」⁶⁾への出店を組み合わせている例もみられる。

2) 1980年代出店者の特徴

これは、1981年の旭橋開通から1993年の街路拡幅までの期間に出店してきた中堅の世代に当たる。出店者の属性と商品は1970年代出店者とほとんど変わらない。しかし、出店の動機は異なり「知人の紹介」、「買物客の多さ」があげられている。このことから、1980年代には、盛岡駅と材木町が旭橋をとおして直結したことによって、よ市の知名度が高まりを見せ、市民に定着してきたことがうかがえる。

3) 1990年代・2000年代出店者

これは、1993年の街路拡幅以降に出店した新しい世代に当たる。出店者の属性はこれまでと大きく異なる。まず、出店者の居住地・本拠地は広範囲になり、安代や葛巻、岩泉をはじめとする遠隔地からの出店者がみられるようになった。従来の生産者世帯に加えて、企業・業者やグループによる出店が加速した。主力商品は、第4図のとおり多様化し、惣菜などの加工食品をはじめ、酒類、雑貨にまで拡大した。出店の動機は、「口コミによって固定客をつかみたい」、「地元の特産品を試したい」「商品をPR



第4図 材木町よ市における出店者の位置と出店年代 (2005年・模式図)
 注) 街路中央部に記した詩座～石座の6つのモニュメントは実際には歩道上に設置されている。
 (2005年9月25日の聞き取り調査より作成)

したい」があげられ、アンテナショップとしてよ市に出店する事例や、通常は常設店舗で小売業・飲食業を営みながら、よ市に支店として出店する事例がみられるようになった。

「材木町よ市」は、新しい世代の新規出店者によって、食生活の中食化⁷⁾と界隈の観光化⁸⁾に対応しつつ、現代的な都市内定期市へと変貌を遂げてきた。同時に、伝統的な世代の持続的な出店によって、生産者農家を基盤とする定期市の真正性⁹⁾もまた維持・保存されてきたのではないかと考えられる。

IV むすびにかえて

調査とまとめを終えて、今後の課題が以下のとおり明らかになった。

1. 観光ルート調査では、今回の交通結節点側（盛岡側）からのアプローチについては、調査地点を再検討するとともに、交通後背地側（十和田八幡平地域側）からの視点を付け加える必要がある。
2. 「材木町よ市」の調査では、今回の出店者側からのアプローチに加え、母体となる材木町商店街側に焦点を当てて、よ市への取り組みについて考察を加える必要がある。

本稿の作成に当たり、旅行者の皆様ならびに材木町よ市出店者の皆様には、聞き取り調査に快く応じていただきました。盛岡市材木町商店街振興組合と材木町よ市実行委員会、盛岡ホテル協議会、ホテル東日本盛岡、ホテル森の風鶯宿、盛岡市観光課、岩手県観光経済交流課、岩手県観光協会の皆様には、資料や情報の提供など、調査のために多大な便宜を図っていただきました。現地調査の期間中には、本学卒業生の清水 紘さん（JR 東日本秋田支社）と辻井宏仁君（京都大学人間・環境学研究院院生）のご協力を得ました。末筆ながら、皆様に心より御礼申し上げます。

注

- 1) 2005年9月24日～25日に現地調査を実施。26日は徒歩巡検に充てた。コースは、仙北町～明治橋～鉦屋町～肴町～上の橋～岩手公園～内丸～大通り～映画館通り～菜園～盛岡駅～材木町～夕顔瀬町である。27日は盛岡ホテル協議会のご協力を得て、「宿泊最前線からみた拠点都市盛岡の変容と展望」と題する講演を聴講、28日は盛岡を発着する長距離バス路線に実際に乗車した後、現地解散した。



写真1 材木町よ市の景観（2005年）
音座付近から旭橋方向を望む
（2005年9月24日 辻井宏仁撮影）

- 2) 内丸・石割桜前、菜園1丁目・ららいわて前、岩山展望台においても、試行的に短時間の調査を行なった。
- 3) バス乗り場における聞き取り調査は、管理者の許可を得たうえで、所属・氏名を明示して実施した。最近の研究例では、沼田・羽田（2004）や小林（2006）がある。一方、JRの駅構内では、同様の調査は認められていない。
- 4) 本研究の調査が幕沢（2006）の調査と異なる点は、自家用車やレンタカーを利用する旅行者がほとんど含まれていない点である。
- 5) この理由は、本稿では盛岡と他圏域との関係に着目したためであるが、盛岡市街地における宿泊の取り扱いについては、今後検討の余地がある。
- 6) 盛岡市神子田で開かれている朝市で、営業日数は年間300日に及び、約280店の出店がある。
- 7) 中食とは、持ち帰りの惣菜・弁当・調理済み食材によって、自宅では調理を施さない食事を指す。
- 8) 清水（2002）によれば、材木町の街路拡幅以降、「るぶ」など観光案内書に「材木町よ市」が紹介され始めたという。
- 9) オーセンティシティ（authenticity）。たとえば、伝統文化と観光を巡る社会的諸関係を議論するとき鍵となる概念（原書房『最新地理学用語辞典』による）。

文 献

- 小林友美（2006）：秋田－仙台高速バス利用者の移動目的。秋大地理，第53号，9-12。
- 清水 紘（2002）：旅行案内書にみる『盛岡』の地域イメージ。秋大地理，第49号，37-40。
- 沼田佳奈子・羽田真梨（2004）：東北新幹線延伸後の盛岡市の交通拠点性－長距離路線バスを指標に－。宇大地理，第7号，38-49。
- 幕沢美穂（2006）：秋田県寒風山を経由する観光ルートの特徴。秋大地理，第53号，25-28。



写真2 材木町よ市における聞き取り調査の様子
（2005年）
（2005年9月24日 辻井宏仁撮影）